

鹿児島大学教育学部 教育実践総合センターニュース

第5号 (平成19年3月)

目次

○ 巻頭言 (教育実践総合センター長 松田君彦)	1
○ 新任教員挨拶・異動	2
○ 学長裁量経費「奄美諸島等における教員の資質向上支援事業」の報告	2
○ 教育相談の活動報告	4
○ 教育実践研究紀要第16巻の発刊報告	4
○ 研究員・研究協力員による研究の紹介	5
○ 公開講座「授業に活かすコンピュータとインターネット」の開催報告	10
○ 公開講座「学校カウンセリング基礎セミナー」の開催報告	11
○ センター運営委員会の報告	12
○ 国立大学教育実践研究関連センター協議会の報告	13
○ 九州地区教育実践研究会の報告	14
○ 総合資料室の利用状況	14
○ 寄贈図書目録	15

■巻頭言

○センターの改組計画について —— 教育実践総合センター長 松田君彦 教授

学校教育が抱える課題がますます複雑・多様化する中であって、社会から信頼される学校づくりを進めるためには、高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた資質の高い教員養成が強く求められています。このような現状を受け、鹿児島大学では、教員養成カリキュラム委員会（平成17年度）や、鹿児島県教育委員会との連携事業推進室（同18年度）を設置し、教育学部を中心とする全学的な教員養成改革を進めています。そして、このたびの平成19年度概算要求において、「県教育委員会との連携による新しい教員養成カリキュラムの開発・実施事業 —全学部・全研究科の教員養成体制整備と教育学部の転換—」を文部科学省に提出し、採択されました。この事業計画は、教育実践総合センターに関連する側面について述べれば、鹿児島県教育委員会の協力を得て、現職教員等を教育学部附属教育実践総合センターの専任教員として迎え入れて、実践的教職科目を主軸とする全学教員養成カリキュラムの構築を推進するというものです。この事業計画が認められたことで、

- ・本センターを、現行4名（教育実践研究部門2，教育臨床研究部門2）の体制から10名の体制（教育実践研究部門2，教育臨床研究部門2，教職研究部門3，教員研修研究部門3）に拡充・改編する。
- ・新設される教職研究部門と教員研修研究部門に、学部教員の異動による2、鹿児島県教育委員会の協力による現職教員等4（教授2，准教授・講師2）、合計6名の専任教員を配置する。

という新体制が平成19年度からスタートすることになりました。

平成元年5月に教育実践研究指導センターとして開設され、平成14年4月に教育実践総合センターへと改組された本センターは、今回の改編により新しいスタッフと共に新たな目標に向かって努力して参ります。今後とも皆様のご支援とご協力をお願い致します。

■新任教員挨拶・異動

○教育臨床研究部門 有倉巳幸 助教授

平成18年度から、教育実践総合センター教育臨床研究部門に異動となりました。鹿児島大学に着任して8年になりますが、これまで、学校現場でカウンセリングや教育相談、特別支援教育に関する教員研修などを行ってきました。私はもともと社会心理学や集団心理学が専門で、教育臨床は専門外です。しかし、その専門的な知識も、こうした学校現場を中心とした臨床活動に役立っているように思います。これからも、社会心理学や集団心理学で学んだことを活かして教育臨床に携わっていきたいと考えています。

学校現場では、いじめや不登校、軽度発達障害児への対応など、様々な課題が横たわっています。これら喫緊の課題を現場教師が協働して、学校や地域の中で解決していくために、少しでもお役に立てればと常日頃考えています。みなさんよろしくお願い致します。

○教育臨床研究部門 迫 武仁 客員教授（鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課課長）

平成18年10月から、本センターの教育臨床研究部門スタッフの一員として勤務しております。鹿児島大学教育学部の卒業生として、微力ではありますが自分なりに少しでも貢献できたらと思います。

昭和48年、私が高等学校を卒業した年に、鹿児島大学教育学部に「養護学校教員養成課程」が開設されました。養護学校義務化以前のことであり、「男性なのに養護教諭を目指すの?」と言われるなど、養護学校や特殊教育に対する周りの理解も乏しい時代でありました。

それから33年、今は特殊教育から特別支援教育へという大きな転換期を迎え、「養護学校教員養成課程」も「特別支援学校教員養成課程」に生まれ変わろうとしています。33年の時を経て、障害のある子どもへの理解は深まり、学校等においては、様々な支援が展開されつつあります。そのことは、とても喜ばしいことではありますが、学校関係者や地域住民等の理解が得られないで、困っている子どもや保護者がいるというのも現実であります。そういった子どもたちや保護者のために、本センターと県総合教育センターや他の教育機関等との連携を深めながら、支援できればと思いますので、皆様方の御協力・御支援のほどよろしくお願い致します。

○異動

教育臨床研究部門の假屋園昭彦助教授が平成18年3月31日付で異動し、有倉巳幸助教授が平成18年4月1日付で着任しました。また、前岡昌利客員教授（鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課課長）が平成18年3月31日付で退任しました。天野芳子客員教授（鹿児島県総合教育センター教育相談課課長）が平成18年4月1日付で着任し、平成18年9月30日付で退任しました。迫武仁客員教授（鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課課長）が平成18年10月1日付で着任しました。

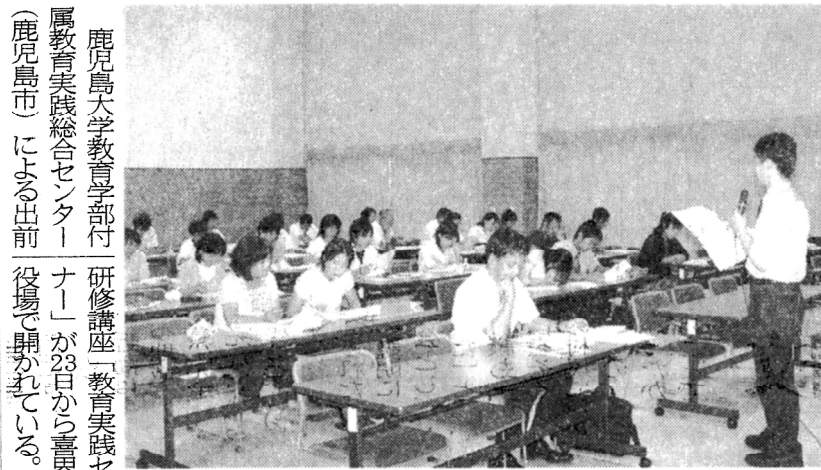
総合資料室の福田桂子事務補佐員が平成18年3月31日付で退任し、三井邦子事務補佐員が平成18年4月1日付で着任しました。

■学長裁量経費

「奄美諸島等における教員の資質向上支援事業」の報告

本センターでは、前年度に引き続いて「奄美諸島等における教員の資質向上支援事業」を、学長裁量経費（50万円）を受けて実施しましたので、その概要を報告します。

鹿児島県は南北に約600kmあり、これは鹿児島市から兵庫県神戸市までの距離に匹敵するものです。しかも、本県には離島が多いという地理的特徴があります。その地域に勤務する小学校～高等学校の教員は、交通手段が不便であったり町村財政が逼迫して旅費が工面できなかつたりする 경우가多く、研修や情報収集のために鹿児島



喜界町で開かれた鹿大教育実践総合センターの出前講座

鹿兒島大学教育学部付
属教育実践総合センター
(鹿兒島市) による出前
「研修講座「教育実践セ
ミナー」が23日から喜界町
役場で開かれている。同

鹿大教育実践センター
出 前 講 座

離島「道徳育む家族生活に変化」

大学の研究成果を公開

喜 界 町

センター長の松田君彦教授は講義で、生活リズムや道徳観をほぐくむ日常的な家族生活や自然体験のあり方が離島でも変化してきていると指摘。

「子どもの安定した自己形成には他者、特に保護者の役割が重要」と説いた。

講座は同センターが奄美群島に出向き、離島の教育課題について大学の研究成果を公開する事業。①奄美群島における学校教育の支援を通じて、鹿児島県と離島の教育水準の向上、離島教育の実態理解と効果的な教員研修に関するノウハウの蓄積を目的としている。

23日のセミナーは午前・午後2講座あり、町内の学校教員や保健師ら約90人が参加した。

「児童期・思春期の心理と発達」と題して講義した松田教授は、現代社会ではテレビゲームなど間接的情報の世界が肥大化、また、欲求不満への耐性が低下し自己中心的な傾向が強まっていると指摘。

親や教師が子どもの関心に寄り添ってコミュニケーションを取り、自分に対する自信、他者への信頼感を子どもたちにはぐくむ大切さを説いた。

このほか、同大の上谷順三郎助教授が「国語教科書教材の読み方教え方」について講義。最終日のきょう24日は午前9時から町役場研修室で、同大の関山徹助教授が「児童生徒理解と学校力向上セミナー」をテーマに講義する。

[大島新聞 (平成18年8月24日) より許可を得て転載]

市へ簡単に出張できません。そのため、教育実践に必要な情報や技術を得ることが困難な状況があります。そこで、本センターのスタッフを中心とする教育学部教員が、奄美諸島まで出向いて「出前」形式の研修講座を実施し、現代の教育課題に関する大学の研究成果を公開することにしました。また、それと同時に、現地の現職教員・行政担当者と意見交換する会を設けて離島教育の現状やニーズを正確に把握することにし、次年度以降の企画や研究に反映できるようにしました。具体的な内容は以下の通りです。

<目的>

- 奄美諸島の学校教育の支援を通じて、鹿児島県と離島の教育水準のさらなる向上
- 鹿児島大学として、離島教育についての実態把握とノウハウの蓄積

<喜界町における教育実践セミナー（出前講座）>

- 日程：平成18年8月23日（水）～8月24日（木）
- 内容：

[第1日目]

午前（49名の参加）

・開講式

・児童期・思春期の心理と発達 [松田君彦 教授（センター長）]

午後（33名の参加）

・国語教科書教材の読み方教え方〔上谷順三郎 助教授（国語教育）〕

〔第2日目〕

午前（42名の参加）

・児童生徒理解と学校カウンセリング〔関山 徹 助教授（本センター）〕

＜徳之島町における現職教員・行政担当者との意見交換会＞

○日程：平成18年12月8日（金）～12月9日（土）

○内容：離島における教育の実態と教員研修のあり方を調査するために、下記の調査を実施した。

〔教育実態の調査〕

徳之島町立山小学校、手々小中学校を訪問して、授業参観および施設参観をおこなった。また、校長・教頭へのインタビューもおこなった。

〔教員研修のあり方についての意見交換会〕

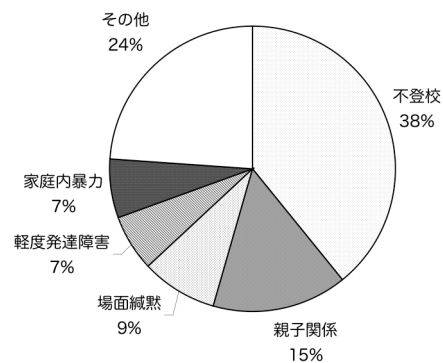
徳之島町内の小学校と中学校の教頭および行政担当者と意見交換をおこなった。

出前講座（喜界町）の受講者を対象にアンケートを実施したところ、77%が「たいへん役立った」、21%が「役立った」との回答があり、高い満足度が確認されました。さらに、自由記述欄では「これからも離島でこのような研修会を開催していただけたらと思います」等の意見が多く寄せられました。また、大島新聞と南海日日新聞の取材を受けて、記事として大きく取りあげられました。また、徳之島町における現職教員・行政担当者との意見交換会では、職員研修における特にニーズの高いテーマ（英語・複式・教育相談・特別支援）や効果的な開催の時期や方法、ITインフラの現状、等に関する様々な知見を得ることができました。

今年度の成果を土台にして、来年度はより充実した企画を用意したいと考えています。

■教育相談の活動報告

平成17年度一年間の教育相談利用状況は、前年度から大幅に増加して、相談件数46件・相談回数358回（電話相談含む）でした。内容面では、不登校・不登校傾向についての相談が首位を占めており、その他には親子関係、場面緘黙、軽度発達障害、家庭内暴力などについての相談がありました（相談内容の内訳はグラフを参照）。また、玩具や心理検査用具を購入して設備面の整備を図りました。今後は、相談業務の質をより充実させるために、地域の関係機関との連携を一段と強化していきたいと考えています。



■教育実践研究紀要第16巻の発刊報告

本センターの編集により、『鹿児島大学教育学部 教育実践研究紀要 第16巻』を平成18年12月1日付で発刊しました。今年も数多くの方々にご投稿いただきました。紙面をかりて感謝いたします。なお、目次を以下に示します。関心のある方は、本センターまでご連絡ください（連絡先は最終ページ参照）。

論文

日本と海外における音楽教育の比較研究

～よりよい学校音楽のあり方をめざして～ …………… 畠澤 郎・宮原 真紀・味園 美和

美術教育における色彩理解に関する研究（2）

- 教師に必要な色彩の基礎知識— ……………小江 和樹
 離島・僻地における養護教諭の職務 ……………徳田 修司
 校区コミュニティと地域教育実践
 —喜界島荒木小学校と校区住民の教育実践を中心に— ……………神田 嘉延
 沖縄における学校づくり ……………狩野 浩二
 道徳教育で育むべき「助け合い」の心とは何か
 ～対象や場面の違い、性差にもとづく「助け合い」の心の内容分析的研究～
 ……………堀田 竜次・假屋園 昭彦
 初任教師の心理的発達に関する研究（2）
 —ソーシャル・サポートの及ぼす初任教師の教師観への影響について—
 ……………宇都 慎一郎・今林 俊一
 離島と大学の教育を相互に支援する交流システムの活用マニュアルの開発と評価
 ……………園屋 高志・関山 徹・河原 尚武・吉村 和也
 小学校教師のメンタリングに関する研究 ……………乾 丈太・有倉 巳幸
資 料
 鹿児島県内小・中・高校のエネルギー環境教育と生徒の意識について ……………田辺 征一・門 久義
報 告
 理科における演示装置作成とその意義 ……………八田 明夫・韓 長明

■研究員・研究協力員による研究の紹介

本制度は、教育実践に関するテーマについて本学部教員と共同研究を行うために設けられた制度です。前号での報告以降、1)～7)の研究がおこなわれています。ここでは特に、番号に「*」のついた方々の研究を紹介します。

【凡例】 1行目：研究員氏名＋研究協力員氏名（所属）、2行目：研究期間、3行目：研究テーマ

- 1) 畠澤郎 ＋ 味園美和（鹿児島県立奄美高等学校教諭）・宮原真紀（鹿屋市立鹿屋女子高等学校教諭）
 平成18年4月1日～平成19年3月31日
 日本と海外における音楽教育の比較研究～よりよい音楽教育のあり方を探る～
- 2) * 関山徹 ＋ 佐野美喜（慈生会ウエルフェア九州病院心理士）
 平成18年4月1日～平成19年3月31日
 児童生徒を対象とした臨床心理学的援助について（2）
- 3) * 関山徹 ＋ 久留一郎（鹿児島純心女子大学大学院教授）・餅原尚子（鹿児島純心女子大学助教授）
 平成18年4月1日～平成19年3月31日
 臨床心理学的な援助技法を備えた人材の養成について
- 4) * 八田明夫 ＋ 木下紀正（鹿児島大学地域共同研究センター客員教授）
 平成18年4月1日～平成19年3月31日
 環境と防災の科学と教育（2）
- 5) * 三仲啓 ＋ 金柿主税（熊本県/御所浦町立御所浦北中学校教諭）
 平成18年4月1日～平成19年3月31日
 離島における遠隔映像観測システムと教育利用の研究（3）
- 6) 河原尚武 ＋ 白尾裕志（霧島市立牧之原小学校教諭）
 平成18年4月1日～平成19年3月31日
 地域の特色を生かした総合学習の教育内容づくりと教育課程編成

7) 山本清洋 + 胡云明 (鹿児島大学教育学部教育学研究科修了)

平成18年4月1日～平成19年3月31日

中学生の体力・運動能力と生活構造の関係

○児童生徒を対象とした臨床心理学的援助について (2)

報告者：佐野美喜 (研究員：関山徹、研究協力員：佐野美喜)

1. 研究目的とこれまでの経過

本研究は、学校心理士及び病院心理士が関わった児童生徒への臨床心理学的援助について、実践的成果を蓄積し特色を整理することを目的に17年度から行っています。

前年度は、言語表現が十分でない生徒への援助手段としては、言語以外のコミュニケーションが用いられる場合でも生徒の『気づき』が促されるような関わりの必要性が確認され、母親への援助については、日頃の労をねぎらい、生徒の小さな変化を母親と援助者で共に確認しながら、母親の自尊心の回復と生徒への理解を図ることの重要性が吟味されました。

今年度も、思春期心性を持つ者への援助を中心に検討を行い、特徴を整理するとともに、援助に役立つ知見について考察しています。

2. 今年度の経過

主に自傷行為や他者への暴力が見られる事例について検討しました。

これらの事例では、自傷行為や暴力行為に至る過程を「覚えていない」ことが特徴的でした。イライラなどその時の気持ちを意識化できるよう、援助者は話題を流さず、問いかけや言葉かけを重ね、気持ちを幾重にもなぞるという工夫が検討されました。また、問題行動の背景には強い依存欲求が推測されましたが、適切な形で他者に表現できない傾向が強くなりました。そのため、好ましい依存の仕方を共に考えながら、心理面接の中で援助者に向けられる依存や期待にはそれを満たしつつも、本人自身がその気持ちに気づけるような働きかけの必要性が吟味されました。

家族への援助については、問題行動の意味や今後の見通しを伝えると共に、日頃の親子間の些細なやり取りを詳しく聴き、適切な対応の仕方を助言することや、不登校に関しては登校までの過程を説明するなど、心理教育的な援助の仕方について考えました。

3. 今後の取り組みと工夫

自傷行為や暴力行為といった事例では、本人のみならず家庭や学校への援助や働きかけが急務となったり、関係機関から説明を求められたりすることも少なくありません。生徒と、生徒を取り巻く環境の間で、援助者はバランスを失うことなく、どのような言葉やタイミングで繋いでいくかといった連携の工夫についても、今後実践を重ね、取り上げていきたいと考えています。

○臨床心理学的な援助技法を備えた人材の養成について

報告者：関山徹 (研究員：関山徹、研究協力員：久留一郎・餅原尚子)

1. 研究目的

「臨床心理学的な援助技法」は、学校教育・精神医療・福祉等の領域における対人援助サービスの土台を支える重要な一側面です。そこで本研究では、「臨床心理学的な援助技法」を備えた教員・カウンセラー・福祉職等を養成するために、どのような方法が効果的であるかについて探求することにしました。具体的には、①臨床心理査定(教育相談や特別支援教育、心理療法等における見立て)、②臨床心理面接(教育相談や心理療法等における、主に個人への関与)、③臨床心理的地域援助(学級集団や地域社会等のコミュニティへの関与)の3領域について取り上げて、関山(教育相談・教員養成;本センター教育臨床研究部門)と久留・餅原(カウンセラー養成・地域援助;鹿児島純心女子大学大学院心理臨床相談室)の専門と所属先の特性を活かしながら連携して研究を進めました。

2. これまでの経過

(1) 臨床心理査定と臨床心理面接の領域

鹿児島県内で定期的に開催されている2つの研究会において、アンケート調査を実施しました。これらの研究会は一方が臨床心理査定領域を、もう一方が臨床心理面接領域を研究テーマとして掲げており、その構成員は学校・病院・福祉などの領域でカウンセラーあるいは教師として勤務している者とその前段階にある大学院生でした。設問は自由記述方式で、①研修のあり方と②大学院・学部における教育のあり方に関して尋ねました。仮分析の結果、研修については、経験段階に応じた研修モデルの必要性、研修会・研究会における受身的姿勢を脱した学びの必要性、倫理についての意識向上の必要性などが見出されました。また、大学院・学部における教育のあり方については、基礎的内容の確実な定着化の重要性、事例と理論の両面から学ぶ姿勢の重要性、実習やスーパービジョンの有効性などが見出されました。

(2) 臨床心理的地域援助の領域

現職教員（小学校・中学校・高等学校・養護学校）対象の研修会において、アンケート調査を実施しました。今回は、特に不登校についての教師の研修ニーズを調査することにして、不登校児童生徒の理解とその支援に関して、自由記述形式で尋ねました。仮分析の結果、背景理解の仕方、予兆のとらえ方、初動のあり方、保護者とのコミュニケーション、校内連携、専門機関についての知識と連携、他の児童生徒への配慮、長期化した場合の留意点、復帰段階における留意点、怠学との関係などの点についてのニーズが見出されました。

3. 今後の取り組みと課題

今後は、これまでの質的研究から得た知見を土台にして、量的な観点（たとえば質問紙やチェックシートの作成など）も取り入れて、より客観的で包括的な知見を蓄積していきたいと考えています。経験年数や職場の種別などの観点からも分析できるような、実験デザインを組む必要もあります。また、各自の発見的で主体的な成長を促す学びのあり方を探っていくことも考えています。そのためには、大学院・学部などの初心者教育における留意事項、中堅者における留意事項、経験や領域に関係なく必要とされる共通事項、倫理の問題などについて、教える側だけでなく学ぶ側の視点も取り入れながら整理していく必要があります。

○環境と防災の科学と教育（2）

報告者：木下紀正・八田明夫（研究員：八田明夫、研究協力員：木下紀正）

地域の自然環境の理解と防災への対応など、科学を教育に活かすために研究を進めている諸課題について前報以来の活動を報告します。

1. 火山活動の研究と防災対策のあり方

自然と人間との関わりの中で自然災害についての教育に果たす理科教育の役割は大きく、総合的な学習としても重要なテーマです[1]。その中で、桜島など多くの火山をかかえる鹿児島では火山防災教育が大きな課題であり、2006年3月に教育学研究科を終了した坂本昌弥氏とともに取り組んでできました[2-4]。2005年末の秋田県泥湯温泉のガス中毒事故は、噴気地帯や温泉に多くみられる硫化水素など低温型火山ガスについての警戒対策が、まだ不十分であることを示しています。他方、マグマから直接放出される高温型火山ガスについての理解と対策は阿蘇と三宅島でやっと進みつつある状況です。火山ガス研究の成果を踏まえた火山防災の啓発活動と教育を進める必要があります。

大量の火山ガスによる4年半の全島避難がようやく2005年2月に解除された三宅島では、高濃度火山ガスに対する警戒体制が維持され、居住できない高濃度地区が設定されたままです。今後の火山ガス防災体制の在り方を考える一助として、三宅島火山ガス問題に対する鹿大噴煙火山ガス研究グループの取り組みと、その成果がどう受け止められたかをまとめ[5,6]、2006年9月には渡航して島の方々と懇談しました。

2. 衛星画像立体表示のSiPSEシステムの維持と活用

衛星画像と数値標高データを結合した立体表示であるSiPSE-3D衛星画像によって、地形と土地被覆状態について臨場感のあるイメージを得る事が出来ます。これは自然災害の研究や説明資料として、行政担当者の理解促進と住民に対する啓発活動・学校や社会教育での防災教育の中で活用することが期待されます[7]。2006年6月4日に桜島南岳山頂付近の東側斜面に出現した新火口についてはSiPSE-3D画像を公開し[8]、鹿児島の他の火山と併せて科学教育の集会で紹介しました[9]。また、歴史の舞台を3D衛星画像で見直すことも大きな可能性を秘め

ています[10]。他方、懸案であった SiPSE システムの英文 URL も作成し[11]、国際シンポジウムで発表しました[12,13]。SiPSE-3D 画像で用いる近赤外光線の理解は、物理教育の新しい課題として地上撮影と結びつけて進めることが出来ます[14]。

3. 南西諸島の自然環境理解と教育への活用

北よりの火山の島々については、伊豆諸島とともに島旅への誘いを学術研究集会で行いました[15]。石灰岩主体の南よりの島々についての取り組みは今後の課題です。

- [1] 飯野直子・八田明夫：自然災害・環境教育に果たす理科教育の役割，日本理科教育学会九州支部大会，鹿児島，2006，pp.13-16.
- [2] 坂本昌弥・木下紀正・八田明夫・森脇広：桜島火山防災マップを活用した防災教育，日本理科教育学会九州支部大会，鹿児島，2006，pp.17-20；坂本昌弥：桜島「昭和火口」の活動に備える，南日本新聞朝刊，2006.6.18.
- [3] 坂本昌弥：理科教育における火山防災教育の必要性，全国理科教育大会研究発表論文集，28，2006，pp.250-253.
- [4] 坂本昌弥・木下紀正：最近の桜島火山噴煙活動と火山防災マップを活用した防災教育，2006 年日本火山学会秋季大会予稿集，2006，p.106.
- [5] 木下紀正・飯野直子・坂本昌弥・金柿主税：三宅島火山ガスの動態と防災体制，科研費特定領域「火山爆発のダイナミクス」H17 年度研究成果報告書，2006，pp.406-414.
- [6] 木下紀正・飯野直子・金柿主税：三宅島噴火災害と火山ガス動態研究，日本科学者会議第 16 回総合学術研究集会予稿集，2006，pp.132-133.
- [7] 木下紀正・富岡乃夫也・戸越浩嗣：衛星画像立体表示による災害地形と植生の検討，第 3 回土砂災害に関するシンポジウム，熊本，2006，pp.59-64.
- [8] <http://ese.mech.kagoshima-u.ac.jp/sakurajima06/showanew/showa-n.htm>.
- [9] 中原征五・木下紀正：鹿児島の火山と桜島の噴火活動，科学教育研究協議会九州大会，薩摩川内，2006.6.24-25.
- [10] 吉元輝幸・木下紀正：歴史教育における人工衛星 3D 画像を用いた授業－教育用衛星画像表示システム SiPSE を活用して－，H17 年度鹿児島リモートセンシング研究会講演論文集，2006，pp.1-6.
- [11] <http://sipse.edu.kagoshima-u.ac.jp/sipse/index-e.htm>.
- [12] K. Kinoshita, N. Tomioka and H. Togoshi, Satellite image presentation system for education SiPSE based on DEM data, Proc. 11th CERE Int. Symp. Remote Sensing, Chiba, Japan, 2006, pp.115-120.
- [13] K. Kinoshita, N. Tomioka and H. Togoshi, Construction and application of satellite image 3D presentation system for education, Proc. ISPRS Technical Commission VI Symposium, Tokyo, 2006, pp.160-165.
- [14] K. Kinoshita, N. Iino and C. Kanagaki: New Scope of Physics Education by using Digital Camera and Satellite Imagery, Int. Conf. Phys. Education 2006, Tokyo, Japan, 2006, Prog. and Abstracts p.14.
- [15] 木下紀正・寺本恒夫・坂巻幸雄・福澄孝博、火山の島を巡ろう！日本科学者会議第 16 回総合学術研究集会お国自慢セッション，2006.12.2-3.

○離島における遠隔映像観測システムと教育利用の研究（3）

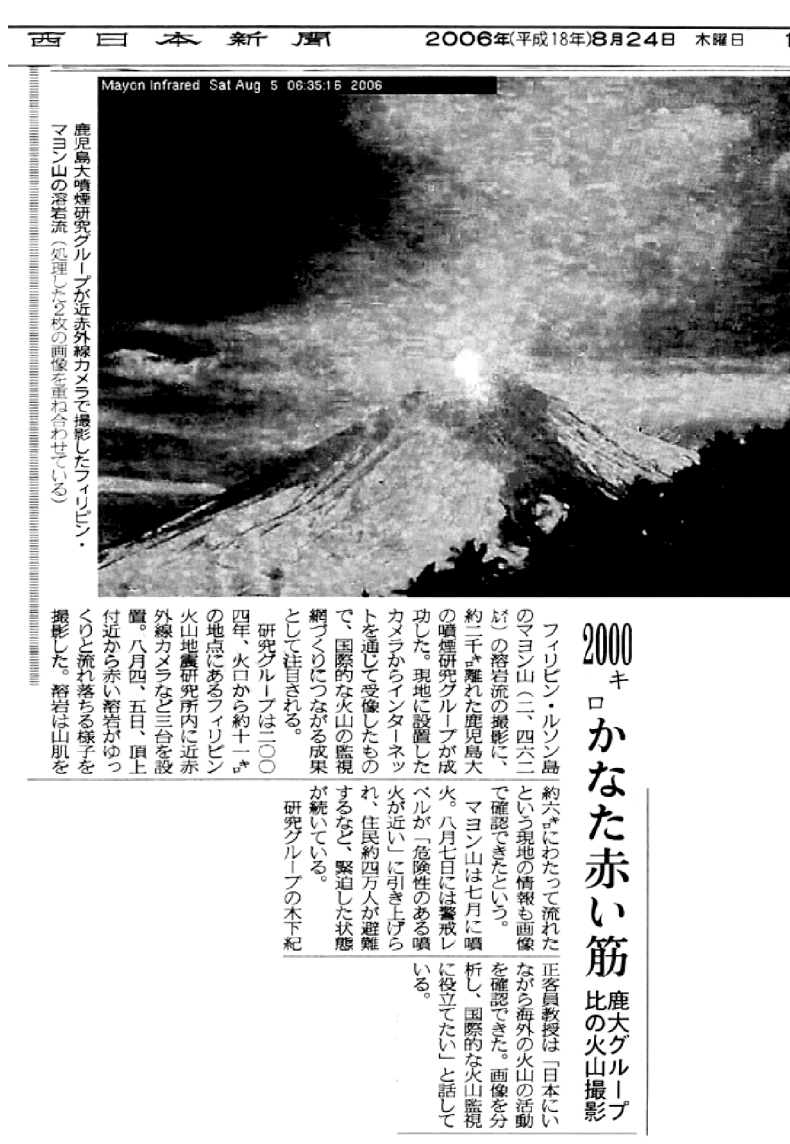
報告者：金柿主税・三仲啓（研究員：三仲啓、研究協力員：金柿主税）

1. はじめに

鹿児島大噴煙研究グループでは、鹿児島県下の 3 火山やフィリピンのマヨン火山などについて噴煙の地上映像観測を自動撮影システムにより継続してきました。2006 年夏に、58 年ぶりに昭和火口（南岳東斜面）付近から噴火した桜島、溶岩流のため多くの避難者を出したマヨン火山について貴重な映像データを収集できました。その映像は編集してホームページで公開しています。この稿では映像収集の方法や教育利用について報告します。

2. 桜島昭和火口

最近数年の桜島噴煙活動は穏やかでしたが、2006 年 6 月 4 日以降、昭和火口跡付近から活発な噴火が続きました。鹿大グループでは、2006 年 7 月、火口正面の麓に位置する黒神中にデジタルカメラ、黒神小にビデオカメラおよびデジタルカメラ（以上インターバル撮影）、Windows マシンによる自動噴煙撮影システム（近赤外撮影）を設置して映像観測を行いました。



[マヨン火山高温溶岩流観測の新聞報道；西日本新聞（平成18年8月24日）より許可を得て転載]

また、鹿兒島県立博物館の桑水流淳二先生、黒神中学校校長出水澤孝洋先生、黒神小学校教頭齋藤博先生から噴火の写真やビデオ映像などを提供いただき、下記のホームページにまとめて掲載しました。

<http://ese.mech.kagoshima-u.ac.jp/sakurajima06/saku06.htm>

3. マヨン火山

PHIVOLCS（フィリピン火山地震研究所）との共同研究として、マヨン火山観測所に可視および近赤外のネットワークカメラ2台を設置し、インターネット経由で観測しています。なお、通信状況が不安定な場合が多いため、同時に現地のNAS（ネットワーク・ストレージ・サーバ）にも映像データを蓄積中です。さらに、ビデオカメラのインターバル撮影では夜間に高感度のナイトショットモードを用い、これらのカメラによって2006年7月以降の鮮明な噴煙および夜間の高温溶岩流を観測することができました。とくに、高温溶岩流（熱異常）については、MODISやASTERなどの衛星画像でも確認できました。

<http://ese.mech.kagoshima-u.ac.jp/Mayon/mayon067-b/mayon067-b.htm>

<http://ese.mech.kagoshima-u.ac.jp/Mayon/mayon2006/mayon2006.htm>

4. おわりに

これまでに撮影してきた大量の噴煙映像は、鹿兒島玉龍高等学校物理部と連携して編集を進めており、デジタル化（DVDに保存）を行っています。鹿大総合研究博物館へ収納したり、一部をインターネットで公開したり

して、科学教材コンテンツとして自由に利用できる環境を整えているところです。

今後は PIV (可視化画像流速計測システム) の基礎資料として、噴煙観測を継続していく予定です。

<参考文献>

- ・「2000 キロかなた赤い筋、鹿大のグループ比の火山撮影」西日本新聞 2006 年 8 月 24 日
- ・「赤外線撮影で火山活動鮮明、鹿大の噴煙研究グループ ネットカメラで長期観測」 南日本新聞 2006 年 9 月 2 日
- ・飯野直子・木下紀正・金柿主税・矢野利明・福原 稔, 三宅島島内の火山ガス環境と植生, 第 6 回大気環境学会九州支部研究発表会講演要旨集, pp.7-8, 2006.
- ・N. Iino, K. Kinoshita, T. Yano and S. Torii, Estimation of Miyakejima volcanic gas hazards using vegetation index images, Proceedings of the 11th CReS International Symposium on Remote Sensing, Chiba, Japan, pp.105-110, 2006.
- ・木下紀正・飯野直子・菊川浩行・永松哲郎・金柿主税・福澄孝博・噴煙・黄砂と地表状態の映像観測における諸問題、第 8 回 CReS 環境リモートセンシングシンポジウム資料集、千葉大学, pp.93-96, 2006.
- ・木下紀正, フィリピン・マヨン火山の噴火活動を捉える, 科学(岩波書店), 76, 2006, pp.1179-1181.
- ・S. Tsuchida, K. Kinoshita and D. Kajikawa, The image integrated database for weather study using Mt. Sakurajima, Proc. ISPRS Technical Commission VI Symposium, Tokyo, 2006, pp.119-122.
- ・N. Iino, K. Kinoshita and C. Kanagaki: Satellite images of air pollutants and land cover for environmental education and disaster prevention, Proc. ISPRS Technical Commission VI Symposium, Tokyo, 2006, pp.102-107.
- ・金柿主税・木下紀正・土田理・飯野直子・福澄孝博, 西南日本とマヨン火山における噴煙自動観測, 2006 年日本火山学会秋季大会予稿集, p.161, 2006.10.
- ・飯野直子・金柿主税・木下紀正・土田理・福原稔・片野田洋, 桜島とマヨン火山の 2006 年夏季火山活動のリモートセンシング, (社)日本リモートセンシング学会第 41 回学術講演会論文集, pp.189-192, 2006.11.

■公開講座

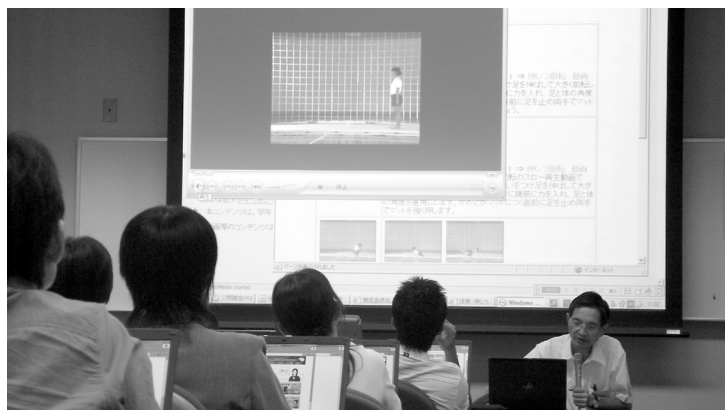
「授業に活かすコンピュータとインターネット」の開催報告

本センターではこれまで公開講座「コンピュータと教育」を実施していましたが、21 回目の今年度から内容に合わせて「授業に活かすコンピュータとインターネット」に改称し、8 月 2 日 (月)～4 日 (水) の 3 日間本センター多目的室で開催しました。

現在小・中学校では、教科の学習や総合的な学習の時間において、コンピュータやインターネットの利用が推進され、さらに高等学校では普通教科「情報」も 4 年目となっています。

本講座はこのような状況の中で教育関係者向けに開講され、県内から 23 名の参加者がありました。

内容と担当者を以下に示します。今年もセンター以外の教育学部の先生方が担当されましたが、単にコンピュータ操作だけではなく、その先生の専門の話も併せて聞けることが、この公開講座の一つの特長となっています。



1日目 午前：コンピュータやインターネットの教育利用

（担当本センター・園屋高志教授）

午後：インターネットを利用した授業実践・デジタルコンテンツの活用

（理科・土田理教授）

2日目及び3日目 プレゼンテーションの作成

（本センター・関山徹助教授、園屋高志教授）

一昨年から内容の一つとして「デジタルコンテンツの活用」を取り入れていますが、これは、ホームページ上に公開されている様々な「デジタル化された教材、素材」を授業で活用するというもので、最近のインターネット回線の整備に伴い、学校の中での有効な活用法となっています。また、授業での教材提示や児童生徒の発表に、プレゼンテーションソフトがしばしば使われているため、その利用法習得を目指して、参加者は熱心に演習していました。

受講者の感想をアンケートから一部掲載します。

- 1) デジタルコンテンツをこんなに簡単に活用できることがわかって、大変参考になった。
- 2) 今回の講座を通して、インターネットでいろいろ出来ることが分かりました。中でもデジタルコンテンツを使う授業に大きな刺激を受けました。
- 3) パワーポイントで何ができるのかイメージできるようになった。
- 4) パワーポイントを使えるようになりたいと思って、他にいろいろさがして受講したが、思っていたような内容ではなくがっかりしてきたが、今回この講座では今自分が学びたいことそのものを教えていただいた。基礎から一つ一つ、そして自分がパワーポイントでやってみたいことを作成できるまでになれて大変うれしい。
- 5) 今回の講座で、多くのプレゼンを作りました。プレゼンで教材を作っているうちに、教材研究が深まっていることに気がつきました。プレゼンで教材を作るには教材を研究しなくてはならないわけで、このことが「分かりやすい授業」（よく教材研究された授業）へとつながっているのだと思います。

このように受講者はそれぞれに学習の成果を得て帰られました。また、今後希望する講座内容として、「表計算ソフトの使い方」「ホームページの作成」「情報モラルの指導法」などが挙げられていましたので、今後に活かしたいと考えています。

最後に講師を務めていただいた各先生、および講座にご後援いただいた鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会に感謝いたします。

■公開講座「学校カウンセリング基礎セミナー」の開催報告

現在の教育現場では、社会の急激な変化を受けてさまざまな新しい問題が生じており、子どもたちの心理的な側面への配慮や支援が重要視されるようになっていきます。このような社会的要請に応えるために、教育臨床研究部門では、教育関係者等を対象とした「学校カウンセリング基礎セミナー－児童生徒理解と軽度発達障害－」を今年度も企画しました。以下に、それらの詳細を報告します。

○日程と内容（※1時限は90分間）

〈1日目；平成18年8月8日〉

- ・1～2時限：児童期・思春期の心理（松田君彦教授；センター長）
- ・3～4時限：学校カウンセリングの基本（関山徹助教授；本センター）

〈2日目；8月9日〉

- ・1～2時限：軽度発達障害の理解とその支援（雲井未欽助教授；障害児教育）
- ・3～4時限：学校災害と緊急支援－スクール・トラウマとそのケア－（久留一郎名誉教授）

〈3日目；8月10日〉

- ・1～2時限：不登校児童生徒の理解とその支援（関山徹助教授；本センター）
- ・3～4時限：学級集団の理解と運営（有倉巳幸助教授；本センター）

○受講者：76名（規定時間以上を受講した方々には、修了証書を授与しました）

○後援：鹿児島県教育委員会・鹿児島市教育委員会

受講者を対象にアンケートを実施したところ、概ね好評な結果が得られました。その一部を以下に掲載します。

- ・総論から入って、いろいろなジャンルの内容だったのでわかりやすかった。
- ・資料が準備されていたのでとても理解しやすくメモもとりやすかったです。
- ・具体的な例（体験やビデオ）などが特に興味深かったです。
- ・カウンセリングの基本から、それぞれの場面別（発達障害・不登校・スクールトラウマ等）の支援のあり方へと段階的に学習できてよかった。
- ・カウンセリングの実技演習のようなものができたらありがたいです。



- ・1日目にアンケートをとってもらい3日目にいくつか取り上げてもらい、とても役立ちました。良かったです。
- ・話の内容もさることながら、先生方の人柄のよさにも触れられた感じがします。
- ・初めてカウンセリングの講座を受けました。特に軽度発達障害と不登校については、周りにそのように思われる生徒がいますので興味深く聞きました。
- ・実践に近い形の講座でした。
- ・このセミナーの発展・応用的なセミナーの開催を期待します。
- ・とても勉強になりました。昨年担任をしていた時のことと結びつけながら、あの時こうしていたらよかったのかと思うことがたくさんありました。また帰って見直して役に立てたいと思います。

また、実習的要素の導入や校種の違いへの配慮、中級レベルの内容への発展などが今後の課題として明らかになりました。

最後に、快く講座を引き受けてくださった講師の先生方、および講座にご後援いただいた鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会に感謝いたします。

■センター運営委員会の報告

本センター運営委員会は、前回の報告（平成17年8月）以降、以下のように開催されました。各回で審議された内容は下記の通りです。

○第22回 平成18年2月28日

- 1) 研究員・研究協力員の申請について
- 2) センター協議会による現代GPの申請について

○第23回 平成18年4月25日

- 1) 平成18年度の事業計画について

- 2) 教育実践研究紀要の発行について
- 3) 教育実践フォーラムの持ち込み企画について

○第24回 平成18年6月27日

- 1) 教育実践フォーラムの持ち込み企画について

○第25回 平成18年8月30日

- 1) 平成17年度の決算について
- 2) 平成18年度の予算について
- 3) 教育実践研究紀要第16巻の編集について

■国立大学教育実践研究関連センター協議会の報告

「国立大学教育実践研究関連センター協議会」とは、全国の教育実践総合センターや関連するセンターで構成されている協議会で、年に2回、総会等が行われています。

第68回、69回、70回の総会に本センターからも参加しましたので報告します。各回とも、およそ以下のような内容について報告、審議、意見交換がなされました。

○第68回 平成18年2月13日（会場：東京学芸大学）

この会には、園屋が出席しました。

1. 総会

- ・会長挨拶、文部科学省挨拶、開催校挨拶
- ・予算、決算、各部門からの報告
- ・アジア・太平洋教育工学東京セミナー／ワークショップ(APEID)の報告ほか

2. 講演「教員養成を取り巻く最近の状況」（東京学芸大学学長 鷲山恭彦氏）

3. グループ討論「各センターより提起された課題について」

4グループに分かれワークショップ形式で話し合いを行いました。

4. 部門会議

教育臨床部門、教育実践・教師教育部門、教育工学・情報教育部門の3部門に分かれて話し合いを行いました。

○第69回 平成18年11月2日（会場：京都教育大学）

この会には、園屋と有倉が出席しました。

総会、グループ討論、部門会議は上述の第68回と同様で、異なる点だけ記載します。

1. 現代GP「教員養成のためのモジュール型コア教材開発」採択報告
2. 講演「教職大学院の制度設計と今後の展開」（京都教育大学教育学部教授 堀内孜氏）

○第70回 平成19年2月13日（会場：東京学芸大学）

この会には、園屋が出席しました。

1. 現代GP「教員養成のためのモジュール型コア教材開発」の開発経過報告
 2. 講演「教員免許更新制について」（鹿児島大学教育学部助教授 狩野浩二氏）
- （これ以外の総会、グループ討論、部門会議は第68回とほぼ同様）

■九州地区教育実践研究会の報告

前号で掲載した以降の日本教育大学協会九州地区教育実践研究会について報告します。この研究会は、九州地区8大学の教育実践研究指導センターおよび教育実践総合センターの教員が集う会です。第23回には関山が、第24回には松田と関山が参加し、以下のような内容の協議や研究発表を通じて意見や情報の交換がなされました。

＜第23回＞（当番大学は福岡教育大学）

○日程：平成18年1月13日～1月14日

○協議

- 1) 各センターにおける教育実習の位置づけ
- 2) 教職大学院へのセンターの関わり
- 3) センターの組織と学内における位置づけ

○研究発表

- 1) 北九州市における「総合的な学習の時間」の実施状況と改善に関する研究
- 2) 教育実践総合センターの地域連携・社会貢献
－人権・同和教育研究・実践部門の取り組みを中心に－
- 3) 双方向性を大切に生活科の授業

＜第24回＞（当番大学は佐賀大学）

○日程：平成19年1月12日～1月13日

○協議

- 1) 法人化後の大学内におけるセンターの位置づけについて

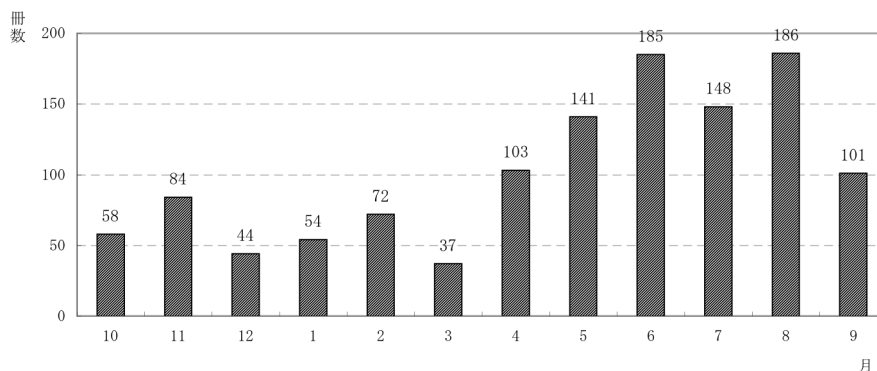
○研究発表

- 1) 教員養成のための資質リストの開発
－学部と附属校園の共同研究を通して－
- 2) 教員養成系学部における組織マネジメントに関する実践的研究
－県教委との連携による「教育ボランティア」の事例から－

■総合資料室の利用状況

本資料室は、学生や教職員はもとより、地域の一般の方々も利用が可能です。教育実習準備や教員採用試験対策をはじめ、さまざまな教育実践や研究活動にもどうぞご活用ください。また、所蔵している文献や図書は、当センターのホームページから検索可能です（学外からも検索可能）。前号以降の利用状況の詳細は、下のグラフのとおりです。

月別貸出状況（H17.10～H18.9）



■寄贈図書目録

平成17年10月から平成18年9月までの1年間に、当センター及び総合資料室に寄贈された文献・図書は、1,167冊でした。本来ならばその全てを紹介すべきですが、紙面の都合上、初刊資料のみ掲載します。文献等をお送りいただいた皆様には、ここに御礼申し上げますとともに、今後ともご刊行の際には、ご惠贈くださいますようお願い申し上げます。

- ・「人間科学論集」1巻1号 西南学院大学学術研究所
- ・「報告」1号 同志社女子大学学術研究推進センター
- ・「研究報告」1号 東京海洋大学
- ・「世界の教員養成Ⅰ アジア編」日本教育大学協会
- ・「幼児教育と小学校教育をつなぐー幼少連携の現状と課題ー」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター
- ・「薩摩堅琴」橋口敏美・橋口歌裕
- ・「職業教育をになう ～専修学校30年のあゆみ～」全国専修学校各種学校総連合会
- ・「心身科学部紀要」1号 愛知学院大学心身科学会
- ・「希望のもてる経済システムー人的資本の将来像ー」日本大学経済学部
- ・「オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」ヒューマンサービスリサーチ1」立命館大学人間科学研究所
- ・「教育総合研究所年報」創刊号 安田女子大学安田女子大学教育総合研究所
- ・「秋季特別展覧会ー八代の歴史と文化 武家の婚礼 八代・松井家のお嫁入り」八代市立博物館未来の森ミュージアム
- ・「中国研究論集 中京大学社会科学研究所 中国の文化と社会研究プロジェクト」白帝社
- ・「教職・教育実践研究」1号 山形大学教職研究総合センター
- ・「研究報告Ⅰ」甲子園短期大学文化情報学科
- ・「わが国における子どもの「いじめ」に関する文献集録 1979年～2004年」IP心理教育研究所/浅井健史
- ・「日本の音楽教育学の再構築に関する基礎的研究」東京芸術大学音楽学部
- ・「どうする「理数力」崩壊」PHP研究所 筒井勝美・西村和雄・松田良一／著
- ・「ミニプリントトリエンナーレ展」多摩美術大学
- ・「言語文化学研究」1号 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科
- ・「ニュースレター」創刊号 立命館大学大学教育開発・支援センター
- ・「Technical Reports」1号 関西大学人間活動理論研究センター (CHAT)
- ・「目標に準拠した小学校英語教育の進め方検証授業」財団法人日本教材文化研究財団小学校英語教材開発研究会
- ・「木を植えた子どもたち」未来を創る会 岡田みつよ著
- ・「テキストの宇宙 生成…機能…布置」名古屋大学大学院文学研究科/佐藤彰一編
- ・「福祉健康科学研究」1巻1号 福山平成大学福祉健康学部
- ・「研究紀要」創刊号 社会福祉法人麦の芽福祉会
- ・「論集」1号 神戸大学国際コミュニケーションセンター
- ・「科学するまなざし」中央公論事業出版村上陽一郎/監修
- ・「トヨタ財団30年史」本文編/助成実績編/CD-ROM 財団法人トヨタ財団
- ・「遺伝資源が結ぶ南九州とアジア」2006 鹿児島大学遺伝資源研究プロジェクト
- ・「生きる為に修ぶーない故に、満足がないー」上・下 日経事業出版センター 著者/漢源彩
- ・「おじさんからの手紙 輝く未来の君たちへ」智書房 著者/佐子武
- ・「国際教育協力研究」1号 鳴門教育大学教員教育国際協力センター
- ・「教職研究紀要」創刊号 京都産業大学教職課程講座センター
- ・「校庭は守られたー江原小PTAの闘いの記録ー」はる書房 大河内昭子著
- ・「地球は青かった/オーストラリア篇・ドイツ篇・アメリカ篇」(株)ワイター京セラコミュニケーションシステム株式会社
- ・「教員養成改革フォーラム報告書」第1回 横浜国立大学教育人間学部教員養成改革フォーラム事務局



〔本センターの外観〕

鹿児島大学教育学部 教育実践総合センターニュース 第5号

発行日：平成19年（2007年）3月22日

発行所：国立大学法人鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目20-6 TEL 099-285-7736 FAX 099-285-7926

URL <http://www-jc.edu.kagoshima-u.ac.jp/>